僕とチョコと二人のこたえ

唐笠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕とチョコと二人のこたえ

【Ｎコード】
Ｎ４８５４Ｖ

【作者名】
唐笠

【あらすじ】
季節はずれのバレンタインネタ。内容はやっぱりいつもの二人（明瑞）です。

（前書き）

今回はいつもと違い、短編同士のつながりはありません。
まったく独立したものですのでご了承ください。
季節はずれもいいところですが、とにかくやりたかったんです。
※今作はいつもの比とならないほど、作者の妄想が爆発しております。
具体的に言うと、明久と瑞希しか登場しないうえにピーな雰囲気まででています。
なので根っからの明瑞好き以外にはきついと思います。
忠告しましたからね？
後から苦情などは基本、受け付けませんので。
それでも良いという方は是非どうぞ！

明久ＳＩＤＥ

「♪♪♪」

今日は２／１４。世間一般的にはバレンタインデーと呼ばれる日だ。男ならば嫌がおうでも期待したくなる日だ。特に意中の人がいる人はなおさら…

まっ、僕にそんなラッキーイベントなんかおきる筈が……

バタン

一度、靴箱を閉める。今、手紙のような物が見えたけど気のせいだよね？

そう思い、そっと靴箱を開ける。

そこには確かに可愛らしい便箋が一通入っていた。

ってことはなに？

僕にもついに春が来たのか！？

今の季節は冬だけど、春が来たのか！？

期待に高鳴る胸を抑えて便箋を読んでみる。今日は早めに登校しているから、誰かに見つかるということもないだろう。

『屋上で待っています』

ただ一言、便箋に似合う可愛らしい字で書いてあった。

手紙での呼び出しなんて、送り主は相当な恥ずかしがり屋にちがいない。

手紙か……

結局、姫路さんのあの手紙は誰にあげるつもりだったんだろう…
そう、二年生になったばかりの時のことを考えながら屋上を目指す。
あれから色々なことがあった。少しは姫路さんに近づけたのかもしれなし、少しも近づいていないのかもしれない。
ほんのわずかな時間だけど、共に暮らしたあの時間は楽しかった。
一緒にショッピングに行き、夕飯の献立を話し合い、二人だけの秘密を共有したりもした。本当に楽しい毎日だった。
もちろん学校では大変な事もあったけど、それも含めてすべてが楽しかった。
姫路さんの努力を無駄にしたくないと思った時、自分でも信じられない程の力をだせたのは今でも鮮明に覚えている。

結局、僕がなにかをするにはいつも姫路さんが必要なんだ。
だから、それ以外では本気になりきれていないんだ。
もちろん、みんなのために怒った事も泣いた事もある。確かにその時も本気だっただろう。だけど、やっぱり姫路さんのために…いや、僕が姫路さんのそばにいたいためにだす本気とは決定的に違うものがあった。

今までの僕にはそれがなにかわからなかった。
僕自身に対する優しさ（わがまま）だと考えたこともあった。
だけれど最近、少しずつ近付いた気がして気付いたことがあった。

すべては君に笑っていてほしかっただけなんだ。

ドアノブを回し、屋上への重い扉を開ける。
送り主には悪いけど、僕も自分自身の気持ちに嘘をつくことはできないから正直に断ろう。その恥ずかしがり屋で可愛らしい字を書く子が僕みたいにいつまでも淡い期待をもたないように……

扉を開ければ冬特有の空っ風と冷たい空気が僕の頬を撫でる。
こんな中、僕なんかのために待っていてくれた人はきっとなにかの間違いで僕に手紙を出してしまったのだろう。

そう、君が僕のことを好きな訳などないのだから。

「明久君」

風に髪を煽られながらも君は振り向く。

「姫路さん…」

信じられない……

あの手紙の送り主が姫路さんだっただなんて。

姫路さんが僕のことを好きでいてくれただなんて…

「手紙…見てくれましたよね」

「うん…」

僕たちの距離はおよそ5メートル。決して遠い距離ではない。

もしかしたらお互いの気持ちはもっと近いのかもしれない…

姫路さんが一歩ずつ、こちらに近づいてくる。なにかの間違いだと自分を律する理性と、間違いではないでいてほしいという本心がせめぎあう。

姫路さんが僕の目の前で足を止める。その顔は真っ赤になっていた。

「あっ、明久君には迷惑かもしれませんがもらってくださいっ！」

姫路さんがうつむき、両手で小さな箱をさしだしてくる。

「姫路さん…これって…」

僕の予想が正しければ中身はチョコ。

チョコならば姫路さんは僕のことを好きということになる。

「やっぱり…迷惑ですよね……」

姫路さんが差し出した手を引っ込める。

バシッ

「えっ？」

しまった…

思わず左手で姫路さんの手首を掴んでしまった。

「あっ…いやこれは違うんだ」

右手で頭をかきながら見え見えの言い訳をする。

「もらって…くれるんですか？」

姫路さんの瞳の中に僕が映っている。いや、正確には僕以外を映していない。

ただまっすぐに僕だけを見ていてくれていた。

常々バカだと言われている僕でもわかる。僕は『こたえ』を求められている。

ずっと僕の胸の奥にしまい続けていた、叶わないと諦めていた想いの『こたえ』を。『こたえ』なんて決まりきっている。それはお互いに言えることだ。

だけど、相手の『こたえ』がわかりきっていても言いづらい。

恥ずかしさ、照れくささ、そして申し訳なさでいっぱいだから。

本当に姫路さんのことを想うならば僕は自分を偽るべきなのだろう。姫路さんの様な人なら、僕なんかよりもいくらでも良い人を見つけられる。もっと有り体に言うならば、僕と姫路さんじゃ釣り合わない。ならば――――

「姫路さん…もうしわ――――んむっ！？」

なにがおこっているんだ！？

突然、僕の視界が姫路さんの真っ赤な顔で覆いつくされる。

目の前の姫路さんの瞳には同じく、顔を真っ赤にした僕が映っていた。

姫路さんのまぶたが徐々に閉じられていく。それにつられる様に僕もまぶたを閉じる。

まぶたを完全に閉じた僕は自然と姫路さんの腰に抱き寄せるように腕をまわしていた。

恋しくて、愛しいその存在を体に刻み込むように強く、一心に求めた。

まるでそれしか知らないかのように姫路さんを強く抱きしめた。

思考が正常に戻ろうとする度に甘い香りが鼻腔をくすぐり、僕の思考に再び靄をかけていく。

ちっとも思考が追いついてこない。ただ、本能だけで動いている様に思えた。

今、僕はなにをしているんだろう？

わからない。

わからないけど、今の時間がずっと続いてほしいとは漠然と感じていた。

この僕の腕の中にいる儚く、か弱く、誰よりも護りたいと想った存在とこの夢の様な時を永久にすごしたいと思った。

だけれど、夢はいつか覚める時がくるのだ。

「ぷはぁ…」

酸素が足りなくなったのか姫路さんは僕から顔を一旦離す。

その顔は真っ赤だけれど、どこか嬉しそうでもあった。

「明久君、私は明久君のことが好きです。明久君じゃなきゃダメな

んです」

僕だってそうだ。姫路さんじゃなきゃ僕は……

「改めて明久君の気持ち、聞かせてくれますか？」

最初から『こたえ』なんて決まりきっている。
僕には後にも先にも姫路さんしかいないのだから…
姫路さんに釣り合わないと思うならば、釣り合うように努力すればいいだけのことじゃないか。だって、僕も姫路さんの事が誰よりも大好きなのだから。
結局、僕は僕自身に嘘をつくことができないのだから。

「姫路さん、僕も――――」

早朝、いつもの待ち合わせ場所で姫路さんを見つけ走っていく。

「おはよう姫路さん。はい、バレンタインデーのお返し」
姫路さんに小さな長方形の箱を渡す。
あの日を境に僕たちは恋人同士となったのだ。
「ありがとうございます明久君。早速ですが開けてもいいですか？」
嬉しそうに言う姫路さんに思わず了承しかけるが、ぐっと堪える。
「んー、そうだな…
箱の中身がなにかわかったら開けてもいいよ」
「うー、なんですかそれは。箱の中身なんてわかる訳ありません」
意地悪く笑う僕に姫路さんが拗ねた様に言う。
あの日を境にお互い、冗談を交えながら話をするのが密かな楽しみとなっている。ただ、呼び名や話し方は以前のままだ。
「じゃあヒント1。今日の日にちなんだものです」
「今日はホワイトデーですからマシュマロやホワイトチョコレートが一般的ですね。地域によってはクッキーという線も考えられますけど」
さすが姫路さんだ。こういった知識も完備している。
「確かにそれもあってるけど、中身は別のものだよ」
「うーん…他にヒントはないんですか？」

考え込む姫路さんも可愛らしい。

「しょうがないなぁ。可愛いい姫路さんに免じてヒント2」

「かっ、からかわないでください／／／」

うんうん、恥ずかしがってるところもかわいいなぁ…

「まあまあ。それじゃあヒント2。今日の日付は？」

「3／14ですよね」

「うん、ホワイトデーだもんね」

「それだけじゃわかりません…」

姫路さんもお手上げならばこの問題は中々いいのかもしれない。
なんだったら何か賭けでもしてればよかった。

「じゃあヒント3。僕は姫路さんとこんな関係でいたいです」

「ますますわからなくなりましたよ…」

さすがに少しかわいそうになってきた。少しいじめすぎたかな？

「しょうがないなぁ。開けていいよ」

「いいんですか？」

「うん」

姫路さんが僕のあげた箱を開ける。

「パイ…ですか？」

「うん、アップルパイだよ」

姫路さんもやっとわかってくれたかな？

「明久君、私とパイみたいな関係にって…」

あれ、なんか怒らせちゃった！？

「ちょっと待ってよ姫路さん！

たぶん、姫路さんはとんでもない勘違いをしてるんだ！」

「これのどこに勘違いのしようがあるんですか！」

「落ち着いて考えて！

ほら、数学的にいうとパイってなんだっけ？」

「数学でパイ（π）っていえば円周率です！それとなんの――あっ…」

どうやら姫路さんも納得してくれたようだ。

「そうそう、円周率は３．１４。それでホワイトデーも３１４でしょ？」

「あぅぅ……

明久君、私はとんでもない勘違いをしてました。ごめんなさい」
姫路さんが申し訳なさそうに頭を下げる。
「そんな謝る程のことじゃないって」
あれだけのことで頭を下げられてはこちらが困ってしまう。
「でも、僕の気持ちわかってくれたかな？」
「その事なんですが、結局私とどういう関係になりたいんですか？」
「それは秘密かな」
「ひどいです！」
頬を膨らませて怒ったアピールをする姫路さんを見て思わず笑いがこぼれてしまう。
「じゃあ、わかるまで姫路さんは僕以外の男の人に気をもつの禁止ね」
「じゃあ、わかったら明久のことしか考えられないほど愛してくれます？」
「お望みなら今すぐにでも」
そう言いながらからかうように笑う。
笑って、怒って、泣いて、これから僕は姫路さんと様々な時をすごしていくだろう。まさか姫路さんとこうなる日がくるとは思っても

みなかった。
叶わない夢だと思っていた。だけれど、僕は今笑ってすごせている。
もしかしたら君がそう願ったのかもしれない。
僕がそうであったように…

いつまでも君と円満な関係を

（後書き）

正直に言えば突発的にバレンタインネタが思いついて書き始めました。
当初では明久が誰かに渡してほしいものだと勘違いしてドタバタな話の予定でしたが、気づいたら二人がくっついてました……
あれ？　同人誌かなにかを作ってたんでしたっけ？
まぁ、すぎたことは忘れましょう。

さて、ここまでついてこれた皆さんなら支障もないと思うのでもう少し小話を。
最近、二人に会う曲を探していまして今のところ２つあります。

英雄
結構ＭＡＤとかにも使われている曲。
『男なら～』のくだりは瑞希の為にがんばる明き久をほうふつさせます。

さぁ
守護月天というアニメのｏｐらしいのですが、作者はそのアニメを見たことがありません…
この曲は友人に進められたもので、原作で●●フラグのたっている瑞希にぴったりだと思います。もちろん、明久視点となります。
特に『君がいなきゃなんもできないし～』のくだりはぴったりだと思います。
同居生活が終わった明久は喪失感にさいなまれて瑞希の大切さに気づくべきだと思う。

以上の二つが私的明瑞ソングです。

よかったら聞いてみてはいかがですか？
では、よろしかったら感想・評価のほどよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4854v/

僕とチョコと二人のこたえ

2011年9月10日18時59分発行